

カール・シュワルツシルド天文台

宮村 撰 三*

1962年5月下旬東独ライプチヒ市にて国際測地学会による「最近の地殻運動に関するシムポジウム」がおこなわれ、日本代表として京大の西村英一教授、国際測地学会の「最近の地殻運動委員会」の幹事として小生の2名が、学術会議会長和達先生はじめ多くの方々のおほねおりで、はじめて国の正式出張として、東独にはいることができました。会議はアカデミーのすばらしい歓待で成功裡にまくをとじました。これについては別に測地学会誌に報告すればよいのですが、ただここでは会議の決議のなかに、大陸移動その他水平運動の確定のため、経緯度測定的重要性がとりあげられ、国際天文学連合との将来の協同が明記されたことを、日本の天文学界の方々におつたえしておきたいとおもいます。

会議のなかの1日はイエナ、ワイマール、ポツダムなどへのいくつかの遠足旅行にあてられましたがいエナへの班に参加したわたくしは、タウテンブルク (Tautenburg) のカール・シュワルツシルド (Karl-Schwarzschild) 天文台とカール・ツァイスの天文測地測器工場を見学することができました。いずれも専門的知識のないわたくしには、おこに小判で、ただ漫然と雑談にふけりながらついでまわっただけでしたので、天文月報からタウテンブルクの見学記をというおはなしでまったく当惑いたしました。

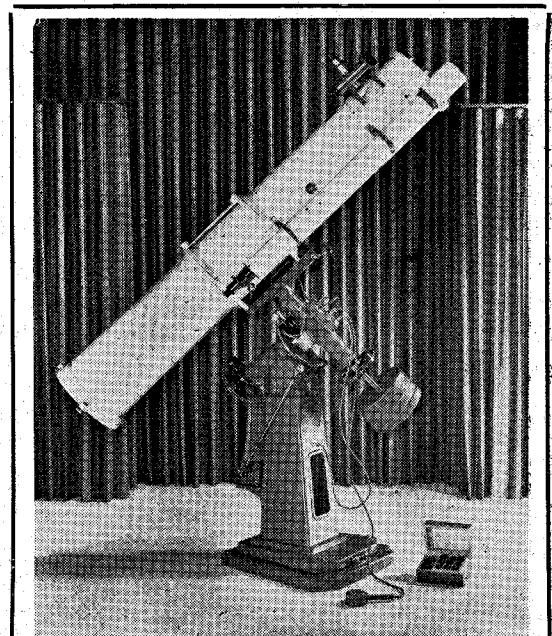
ドイツ民主主義共和国 (DDR) の研究機関の中心はアカデミー (Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin) であり、タウテンブルクのカール・シュワルツシルド天文台もまたアカデミーに所属する、ひとつの共同利用施設であります。タウテンブルクはイエナの東方約 10 km、ライプチヒの南西約 30 km、海拔約 300 m のゆるやかな山頂、ひとざとはなれたしずかな森林地帯にあります。2m 反射望遠鏡をいれたドームのほかに、空気調節装置のための建物、職員アパート、客員研究者用アパート、および事務室、ガレージなどのあたらしいきれいな建物が、点々とならんでいます。敷地はどのくらいか見当もつきません。客員研究者用アパートには研究室のほかに図書室兼講義室もついています。

常勤職員は所長 1、助手 1、技師 1、技手 2、写真手 1、事務員 1、秘書 1、交換手 1、掃除人 2、庭師 1、守衛 4 の計 16 名で、国内国外から 2~3 名の研究者が来訪滞在して研究しているとのことでした。

本天文台の中心である 2m 反射望遠鏡は VEB Carl-Zeiss, Jena の製造したこの型式の最初のものであり、詳細は Jenaer Rundschau-Jena Review No. 5. 1960 にでていそうです。しろうとのわたしにもおもしろかったのは、観測、記録に関係した器械、建築造作物の運動をすべて観測者ののっているエレベーターのコントロール・パネルで電気的におこなうことができる点でした。もちろん自分のエレベーターの運動もできます。望遠鏡はおおきすぎて、照明が具合わるくドーム内でうまい写真がとれなかったのでパンフレットの写真で申しわけないが失礼させていただきます。

訂正とおわび

3月号第 60 頁の池谷氏の彗星発見事情の表題の“1943 a 彗星”は“1963 a 彗星”の誤植でした。執筆者ならびに読者におわび申し上げます。



25 cm 反射赤道儀 (滋賀大学、広島・桑々園)
(宮崎大学)

運転時計電動 (シンクロナスモーター)
赤経赤緯微動電動 (リモートコントロール)

天体望遠鏡専門メーカー 西村製作所
京都市左京区吉田二本松町 27 (カタログ要 50 円)

* 東大地震研究所